

体操

わたしには女の子が二人あり、小学校で勉強している。彼女らは他の教科については、どうということはないが、ただ体操がきらいなのだ。毎朝彼女らには母親か兄に時間割を見てもらうのだが、今日は体操があると聞くと、ほんとうに困ってしまうと言うのである。わたしは教育学には門外漢で、何の批評もできないが、自分の経験を考えると、子どもたちに同情を禁じえないのである。

わたしは小学校には入っていない。なぜなら当地に小学校が建てられた時には、わたしはとっくに学齢を過ぎていたから、入れなかったのである。だからわたしが入った学校は、海軍の学校であった。つまり多数の親類が兵隊になると言ってわれわれを軽蔑した所である。この“兵隊”の生活では、体操と操練は毎日ある。幸いそのころ体操を教えた——いまは海軍省で役人になっている——L先生は人柄が穏やかだったので、われわれには何の不服もなかった。われわれ武技がやれないものは、アレイを認定されさえすればよく、彼が“ダンベル”とか何とかかんとかという号令を発するのを聞いて、隊長の“ミスター高”についてやればよかったのだ。ミスター高は北に向って独り立ち、彼の特別に大きくて重い真鍮のアレイを振りまわす。しかし重いので、彼もあまり振りまわせない。そこでわれわれももっと勝手に、いいかげんにしてお終いなのだ。何年か経って、学堂の総監督がたて直そうとして、軍人出身のM先生を呼んで来た。彼自身の武技は確かに立派だったが、われわれは“ほんとうに困ってしまった”。彼はすべての人間に一律に習練するよう命令した。そこで何人か不幸な学友は横に掛け渡した雲梯の上で、進退ままならず、ある者は木馬の上でとんぼを切ったのに、下に転げ落ちた。アレイ隊は分散して、習練がうまく行ったのも多かったが、相変らずもたついているのも多く、一部分は反抗的逃避をした。初めはしばらく休みを申請するだけだったが、後になると結局本格的な長期休学となった。われわれのグループは、当然校内の注意人物となり、分に安じないと思われた。だがわたしは今思っても決してなんの間違ひもしなかったように思う。M先生個人については、わたしはまだ好意を持っていた方だが、彼のその無理解にして厳格な統一的訓練法については、結局は嫌いだった。

先月、ある友人がわたしとシェイクスピアの演劇について談じ、彼はシェイクスピアは世界的に有名だけれど、彼の重要な作品を読んでも、結局どこがよいのか解らないと言った。これにはわたしもとても同感であった、というのはわたしもシェイクスピアが解らないからである。太陽の光熱は誰も受取るものがなくてもその価値を失わない。だが受け取らなかった人間にとっては効用がなかったと言わざるを得ない。学校の体操は教育者の承認を経て取入れた以上は、たぶんシェイクスピアの演劇と同じように、自ずと重大な価値があるのだろう。だが実際にどのようにすれば受け取られて効用があるようにできるかは、実に重要な問題である。（民国十年十一月）

※初出：1921年11月27日『晨报副刊』